

Title	書評 : Edited by Yoshikazu Shiobara, Kohei Kawabata and Joel Matthews, "Cultural and social division in contemporary Japan : rethinking discourses of inclusion and exclusion" Routledge, 2019
Sub Title	
Author	王, 暁音(Ō, Gyōon) 郭, 笑蕾(Kaku Shōrai) 佐藤, 祐菜(Satō Yuna) 清藤, 春香(Seitō, Haruka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.110- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評 : Edited by Yoshikazu Shiobara, Kohei Kawabata and Joel Matthews,

*Cultural and Social Division in Contemporary Japan:
Rethinking Discourses of Inclusion and Exclusion*

Routledge, 2019

王 暁音、郭 笑蕾、佐藤 祐菜、清藤 春香

本書は、16 の章から構成される、英語で執筆された編著である。分断と排外主義を、2010 年代後半の日本を理解するうえでの鍵となる概念と位置づけ、日本社会における様々なエスニック／社会的マイノリティへの排外主義の歴史や現況を実証的に検討する。そして、文化的・社会的分断と排外主義を乗り越えるための理論的枠組みを提供することを試みる。本書は、多文化主義（もしくは日本型の多文化共生）、日本における文化的・社会的同質性の「神話」、マイノリティに対する排除と包摂、そしてマイノリティによるアイデンティティ・ポリティクスとその限界を研究課題とする国内外の研究者に読んでもらいたい一冊である。

本書の構成と各章の要約は、以下の通りである。第一部では、研究課題をめぐる日本社会における背景が理論的に検討される。序章で、編者の一人である塩原良和は、分断と排外主義という概念の系譜と定義を整理する。本書によれば、分断とは、物理的な接触やコミュニケーションの不足のことだけではなく、他者への想像力が欠如した状態を指す。また、排外主義とは、個人的・社会的そしてナショナルな空間から、物理的・象徴的に他者を排除するという主張や実践、そして運動のことと定義される。現代の社会変動（後期近代）がもたらす分断社会では、誰もが意識的・無意識的な不安定さや傷つきやすさ（vulnerability）を持ちうる。しかし、マジョリティの傷つきやすさは、マイノリティをターゲットとした排外主義に簡単に変貌する。それは、マイノリティの持つ違いが制度的に認められないために、かれらが「不道德な他者」として表象されるためである。ノア・マコーマックと川端浩平による第 1 章は、塩原の理論的枠組みを発展させる。個人化が進み、ネオリベラルな価値観が広がる現代においては、社会的・経済的な問題は個人の選択と責任に還元され、二つの帰結をもたらす。一つ目に、人々の不安定さと不安の増大によって、前述したマイノリティをターゲットとした排外主義が生まれる。二つ目に、マイノリティの連帯と運動の可能性は低下する。従来アイデンティティ・ポリティクスは一定の成果を上げたものの、「われわれ」と「かれら」の分断を再生産してしまった。今日のポスト・アイデンティティ・ポリティクスの時代において研究者は、個別のマイノリティの問題が、いかに他のマイノリティやマジョリティの問題と交差しているのかを検討する必要があると、著者らは結論付けている。

第二部では、事例研究を通じて、日本の人種的および民族的マイノリティが直面する排外主義が紹介されている。ジョエル・マシューズの第 2 章では、最も頻繁に排外主義のターゲット

王暁音、郭笑蕾、佐藤祐菜、清藤春香「Edited by Yoshikazu Shiobara, Kohei Kawabata and Joel Matthews『*Cultural and Social Division in Contemporary Japan: Rethinking Discourses of Inclusion and Exclusion*』『三田社会学』第 25 号 (2020 年 11 月) 110-114 頁

とされる在日コリアンの外国人としての歴史と特殊な法的地位が紹介されている。筆者はこの排除の歴史を概説する上で、植民地構造の下で与えられた特権の喪失を恐れることが日本型のパラノイアであると主張している。第3章で朴金優綺は、朝鮮学校の歴史を紹介し、政府という「上」からの教育補助金の停止という組織的排除や「下」からのヘイトスピーチの現状を指摘している。マーク・ウィンチェスターは、第4章で現代日本のヘイトスピーチ運動の対象となっている北海道のアイヌ民族についての言説を分析している。彼はアイヌの否定的主張の系譜とレトリックを調べ、そのような言説が極右派の政治運動とインターネット上のヘイトスピーチに関連していることを警告している。高橋進之介の第5章においては、沖縄の基地問題の政治的発展を考察することによって、本質主義的ではないアイデンティティ・ポリティクスのあり方が模索される。すなわち、ローカライゼーションとリージョナライゼーションという二つの方向性に基づく地域性である。下地ローレンス吉孝と小ヶ谷千穂による第6章では、日本の「ハーフ」の歴史と概況が紹介され、特に JFC (Japanese Filipino Children) が直面している様々な社会問題が提示されている。鈴木江理子の第7章では、政府およびマスコミによって「不法」および「偽装」として非難されている、非正規滞在者の問題に焦点を当てている。かれらは職場や行政のサービスから除外されることがあり、これは日本にさらなる社会的分断をもたらすという。石川えりは、第8章で、亡命希望者に対する日本政府の排外的な態度を検証する。亡命希望者のほとんどが単に日本で仕事を探すことを目的とした「偽装難民」と政府によりみなされているが、公的支援がないことは、かれらが直面する貧困や社会的排除の原因となると指摘されている。

第三部でも事例研究を通じて、社会的マイノリティが直面する排外主義が描かれている。近代以降の同和問題を描いた石川真知子の第9章によれば、19世紀の段階で既に支援施策が「逆差別」だとの福祉ショービニズムが表れており、現代でもネットを通じた差別が続き、一定の戦略性があったかもしれない「寝た子を起こすな」論は、もはや通用しない。三部倫子の第10章では、メディアで注目される以前の世代であり、「普通」の家族観に沿い男性と結婚・出産し、その後離婚した LGBT に焦点を当てる。当事者は「LGBT ブーム」世代と自身は異なると述べつつも、ブームから新たに得た言葉によって、自己を表す兆しもまた見せている。猪瀬浩平の第11章は、障害者の社会運動を紹介している。優生思想が残る社会に対し、当事者は70年代頃から健常者中心主義への批判や自立支援を求めてきた。しかし結果的に自立できた当事者と、病院に残され周縁化される当事者との間に分断が生じた。筆者によれば、相模原の事件はそうした排除の繰り返しの中起きた悲劇である。原田峻の第12章は、3.11の福島原発事故の避難民の現況を描く。強制的に避難させられた原発の近隣住民は、期間が不透明な避難所での生活を余儀なくされ、自主的に避難した県民は、社会的孤立や偏見に直面しやすい。第13章の山北輝裕は新自由主義の下でのホームレスの現況を描写している。筆者は地域住民と当事者の交流の事例から、施設で一律に集団生活を送らせる「管理」ではなく、当事者自身の能動性に基づい

たハウジング・ファーストが必要と主張している。

第四部では、排外主義を乗り越えるための理論的可能性について論じられている。第 14 章では、川端浩平と山本直子が、在日コリアンと南米移民の事例を取り上げ、オールドカマーとニューカマーが経験する社会構造の交差性 (intersectionality) に焦点を当て、日本における「共生」の原理を再考する。在日コリアンは、世代交代と社会変化の中で、従来のアイデンティティ・ポリティクスが弱体化し、個人化される傾向が強くなっている。南米移民の第 2 世代の一部は、同化も排除もされない第 3 の道を選択する。そのため、川端と山本は、マイノリティの日常的・交差的な実践における可能性を複合的な課題として捉えることが重要だと主張する。最終章では、塩原良和と鈴木弥香子が、現代日本において排外主義を乗り越えるための理論的アプローチ、共生の原理に関する議論を再検証する。そして、ポストコロニアルの視点を援用しながら、日本国内外の学術分野において、多文化主義とコスモポリタニズムに対する批判的な再定義を検討する。多文化共生に関する公的言説と政策は、本質主義による「日本人と外国人」という二項対立から成り立つため、マジョリティのマイノリティに向ける想像力が妨げられる傾向にあったと分析される。それに対して、反本質主義とハイブリット性を強調する立場から批判がなされたものの、そのような立場もまた、マイノリティの文化を日本のメインストリームに統合／同化させようとする公的言説を乗り越えることはできなかった。塩原と鈴木は、社会的分断を乗り越えるために、空間性 (spatiality) という視点から、境界 (border) を越えて出会った他者と共生 (conviviality) / 共棲 (cohabitation) する必要があるとする。そのために、オルタナティブな想像力として、他者との対話可能性を高めていかなければならないと主張する。

続いて以下では本書の意義を検討した上で、評者のコメントを記したい。本書は、日本における排外主義を様々な視座から領域横断的に分析した集大成である。一口に排外主義といっても、中央政府や地方自治体の政策からの排除、制度的な排除、市民による日常的な排除といった様々な形があり、それらが精緻な実証分析によって浮き彫りになっている。また、そのアプローチは、歴史分析、言説分析、政策分析、理論分析など多岐にわたっている。

また、本書の最大の魅力は、その理論的かつ実践的な貢献である。本書は、日本の植民地支配に由来する「古い」エスニック・マイノリティから、3.11 によって生まれた福島避難民という「新しい」社会的マイノリティまで、一見すると全く異なった人々の直面する課題を、排外主義と分断社会、新自由主義といった鍵概念によってまとめ上げる。すなわち、ポスト・アイデンティティ・ポリティクスの時代において排外主義と社会的分断にどう向き合っていけばよいのかという共通の課題を示している。

さらに本書では、その共通の課題に対する理論的・実践的な方法論を呈示している。第二部と第三部では、それぞれのマイノリティの分析を通して、上述の問いに対する個別の答えが示されている。例えば、沖縄の反米軍基地の運動を研究対象とする第 5 章では、本質主義的な属性に基づいたアイデンティティ・ポリティクスではなく、ローカライゼーションとリージョナライゼーションという「地域性／場所性」に基づいたアイデンティティ・ポリティクスの可能

性が示唆される。また、最終章では、本書のまとめとして、社会的分断を乗り越えるための理論や概念だけではなく、実践可能な方法論も示されている。すなわちその方法論とは、社会的分断を乗り越えるために、われわれが越境的想像力を涵養することである。

そもそも越境的想像力とは何か。越境的想像力とは、物理的・象徴的移動を通じて他者と出会い／なおそうと望むことであり、境界を越えて出会う他者を承認し、共生／共棲するために対話しようとすることであると塩原（2017）は定義する。また本書では、越境的想像力を涵養するために、マジョリティからの脱構築、他者に出会う想像力、「われわれ」の再構築というような共生の前提条件を整えるのが重要であると指摘される。しかし、想像力を働かせるために必要な専門知・経験知・身体知は社会構造によって不均等に配分されている（塩原 2017）。本書によれば、このような不均等な配分を是正するために、われわれは、同じ「空間／場所」を共有する他者と対話することによって、自己反省（self-reflection）と自己変容（self-transformation）を行うことが必要である。この意味で、想像力には、他者を承認し自己を認識する責任が伴う。著者らはこのような論理が楽観的にも抽象的にも聞こえうると自覚しているものの、日常的にマイノリティに関する問題を考えている者にとっては、その重要性は経験的な事実なのではないだろうか。

本書は、それぞれの専門家が現代日本社会における様々なマイノリティをめぐる状況を丹念に分析し、英語によって親切な形で国際的に発信している。マジョリティ-マイノリティをめぐる国際比較の一部として、本書は参照する価値があるだろう。LGBT や「ハーフ」への関心が急速に高まるなど、近年、日本や世界におけるマイノリティをめぐる状況が目まぐるしく変化するなかで、最新の状況を英語で発信することの意義は大きい。しかしながら、本書は現代日本における文脈を詳しく紹介しているものの、排外主義やそれぞれのマイノリティの国際的な位置づけが明確ではない。本書自体にもそのような国際比較の視点があればより興味深いものとなっただろう。

また、本書ではそれぞれのマイノリティの「境界」それ自体は、あまり検討されていないように思われる。例えば、相模原の事件の植松聖容疑者自身も、薬物依存症の「精神障害者」であったが、そうした依存症患者と、他の精神障害者や発達障害者等との境界は事件後強化されたのか。あるいは、誰がより「ハーフ」とみなされ、誰がみなされにくいのか。マイノリティ集団内の多様性はもとより、その「境界」も自明なものではない。本書では「境界」を超える重要性が強調されていることから、この点は無関係ではないと思われる。

さらに、日本社会における新しいマイノリティ集団の出現や、集団内に現れる新たな境界に関して、より鋭敏に追跡する必要がある。例えば、新自由主義のもとでは、外国人高度人材は日本に国益をもたらすとされる。かれらは従来の外国人労働者と異なり、日本社会においてより主体性を持ち、移動可能性が高い。このように、マイノリティでありながら強者とされている外国人高度人材の出現は、外国人労働者という集団内の境界の細分化に拍車をかけていると

いえる。一方、期限付きの単純労働者とされている技能実習生の多くは、日本社会と希薄な関係にあるため、メインストリームと分断関係になる機会さえ持っていないという点にも留意しなければならない。マイノリティ内部の細分化および移動パターンの多様な展開は、越境的想像力を豊かにするのか、もしくは、さらなる社会的分断につながるのかについて、動態的な視点から検討していくべきである。

最後に、本書を読んでこのテーマに関心を持った読者には、編者である塩原、川端、マシューズをはじめ、本書の著者の多くが寄稿している、『社会的分断を越境する』(2017)も参照されることを勧めたい。それによって、本書の位置づけもより明確になるだろう。

【文献】

塩原良和・稲津秀樹編著, 2017, 『社会的分断を越境する—他者と出会いなおす想像力』青弓社。

(おう ぎょうおん、かく しょうらい、さとう ゆな、せいとう はるか
慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程)